

こくろう秋田

もう一人仲間を

地方本部は5月14日国労会館で、東日本本部青年部から因泥青年部長をはじめ4名の参加者を得て「組織拡大総決起集会」を開いた。

集会の冒頭、瀬下委員長がJR不採用問題の経過を交えた挨拶



(別掲)を行った。

続いて、因泥東日本本部青年部長から「青年部は毎年学習交流会を開催し、学習と経験交流を通じて国労に対する信念はゆるぎのないものがあり、JR採用として横のつながりを大切に取組んでいる。和解以降、国労敵視の雰囲気はなくなりつつあり、昨年以降3名の拡大をしている。今年も高崎で31歳の社会人採用新入社員が加入があった。国労でなければ職場の労働条件改善はできない。チャンスを生かして、あきらめないで組織拡大に取組み、先輩達の闘いを引き継いで退職まで一緒にやっていきたい」との挨拶があった。

引き続き、参加した青年部員から自己紹介があり、それぞれから挨拶を受けた。

森岡書記長(JR貨物・浜川崎駅)

新人研修では国労批判のビデオを見せられていた。父親が国労組合員であったのでユニオン

「先輩・自信をもって」と励まされる場面もあった集会終了後の懇親会参加者

国鉄労働組合
秋田地方本部
(秋田市中通
7-2-21)
018-832-3775
発行責任者
瀬下 一司
編集責任者
佐藤 浩一

結成の集団脱退のときはJR発足の際、子供ながらに見てきた脱退の悲劇が思い出された。若い人は気がつくのが早く、仕事のことを真剣に考えている。同じく働く若い人をなかなか入れられないジレンマはあるが、多くの皆さんと活気のある交流をぜひしたい。

堀内副部長(JR貨物・塩尻機関区)
4月1日の貨物入社行動では、水道橋の本社前でプラカード、ピラ配布でアピールしてきた。長野駅では2名の青年部員が出発を担当している。2名とも乗務員希望なので、実現に向けサポートしていく。

高橋青年部員(JR貨物・塩尻機関区)
職場の取組みの中で仲良くなつて国労に迎え入れる準備ができ

4月26日の臨時全国大会はJR不採用問題の解決案受入れを全体で確認する大会として成功させた。

秋田地本は2001年、地方本部役員を中心に組織の3分の2が脱退・新組合結成という他の地方本部にはない困難を抱え、しかも、昇進差別など自らの差別を跳ね返す闘いを取組みながらこの課題を闘ってきた。

由利本荘市や潟上市、にかほ市、北秋田市など数多くの自治体意見書採択、労組・政党や国

ていながら直前になって断られたことがあり、それ以降凍結状態での拡大の取組みが進んでいない状態。しかしそれではだめだと反省し、組織拡大に取組んでいかなければと思っている。

その後、地方本部の佐藤組織部長から、これまでの地方本部の取組みや今後の取組みについての提起があった。また、参加した各支部・分会代表者からは今までの取組みや今後の決意を発言してもらった。

秋田支社では、今年も研修中に接触するなど会社ぐるみで行われている実態がある。コンプレックスの点からも問題があり、会社の姿勢を厳しく問う必要がある。

他労組組合員を行事に誘ってつながりをもっている。今後也希望を聞きながら取組むとともに、青年部の皆さんの声を生かしていきたい。

若い人との交流会を開催した。業研や小集団などに時間を取られ、組合の動員に対する若い他

会議員などに対する要請行動、労働委員会の労働者側委員の意見書採択獲得。そして、20年間に及ぶ生活援助カンパや物資販売などを通じての闘争団に対する生活支援を続けてきた。

こうした取組みの中で分裂以降4人の仲間を国労に迎え入れることができた。今回のこの到達点は我々地方本部にとってもまさに20数年の闘いの成果を確認できる内容ではないだろうか。

委員長あこし(要旨)

労組組合員のばやきも聞こえてきており、相談できる雰囲気づくりに取組んでいる。職場で行われる勉強会では、問題点を意識的に出すようにして若い人にアピールするように心がけている。仕事とともに国労で頑張っていることを見せたい。頑張りよう、ものの言える社員として取組んでいきたい。

職場では外注化が進められ、幹を残して枝を切るような状況。平成採用の若い人は何事にも無関心な状況があり、同じ話題で話をするを中心に取組んでいきたい。

職場の若い人はほとんどが大卒。国労活動を地道に続けながら、労働条件改善を中心に、他労組組合員にも働き掛けていきたい。

職場の組合員が10名になって大きい掲示板を申請。他労組からも注目されているのを実感するとともに、数が必要と痛感している。早めに組織拡大に取組んでいきたい。いいおじさんから一歩踏み出すことがなかなか

雇用問題が残っているが、政府は人道上の問題として解決に踏み出したことから、司法において「採用責任なし」との判断が下されたとはいえずJRにも人道上の問題として引き続き問われている。不採用問題

が一定の到達点を迎えたことから、もうひとつの重要課題である組織拡大の条件も広がっている。国労は(佐高信さんの言葉を

難しい。対象者を絞って取組みをしたがなかなか成果は上がっていない。個人的なつながりを生かしながら拡大につなげていきたい。ユニオン・東労組に行った人たち、いまだに感情的な思いがある。

東日本本部の配布物と一緒に駅独自のチラシを配布。横手、大曲駅両駅では、新入社員に対して説明会も開催した。昨年採用者の中には、会社・東労組のやり方に対して疑問も出ている。全員の顔写真入りの情報も作成している。今後もしっかり取り組んでいきたい。

最後は瀬下委員長の団結カンパニーで集会を締め、交流会に入った。

交流会は若い人を中心に大いに盛り上がり、青年部からは「先輩たちはもっと自信を持ってください」と励ましを受ける場面もあり、元気と活力のある交流会になった。

借りれば)「JRにおける神経」である。神経が麻痺すれば病気になる。国労は「民主主義の学校」だ。差別に抗して仲間を支えたい。続けてきたこの間の闘いが何よりもそのことを証明している。し、一人一人の組合員が肌身に染み付いている。

今回参加して頂いた東日本青年部の皆さんの話を聞き交流しながら「もう一人の仲間を国労へ」の決意を固めあう集会として成功させよう。